

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

親の心で子供はどれだけでも善くなる

親が間違った心を起こしていると……

多くの子供達は、親が間違った心の波を起し、間違った言葉の波を起している為に非常に損われているのであります。多くの人たちは、子供を愛するあまりに悪しきことばかりを見附けて、「お前はここがわるいのだ」ということを始終言うのであります。そういう言われるとその子供は萎縮してしまいます。そういう子供は、たとい勉強は辛うじてよく出来たにしましても、大いに伸びるということは出来ないであります。「勉強しろ、勉強しろ」と言わなければ勉強しないから、已むを得ず「お前はそんなことでは出来ないから勉強せよ」と言うのだという人があるかも知れませんが、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うのと、いくら勉強しても却って心に憶えないのであります。これは又おかしい現象であります。原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」というような親は、子供に対してどういう心の態度を執っているかと言いますと、「お前は出来がわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。出来るに定っておれば、「勉強せよ」とは申しません。「出来がわるい」と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」とこういう

ろ」と言わなければ勉強しないから、已むを得ず「お前はそんなことでは出来ないから勉強せよ」と言うのだという人があるかも知れませんが、「勉強せよ、勉強せよ」と口癖のように言うのと、いくら勉強しても却って心に憶えないのであります。これは又おかしい現象であります。原理は簡単です。「勉強せよ、勉強せよ」というような親は、子供に対してどういう心の態度を執っているかと言いますと、「お前は出来がわるいのだよ」という考えを懐いているのであります。出来るに定っておれば、「勉強せよ」とは申しません。「出来がわるい」と信じているから、「勉強しろ、勉強しろ」とこういう

のであります。

「うちの子供は出来が悪い」と、言葉に出さなくとも、心に念^{おも}うだけでも一つの波を起すことであります。親^{また}又は教育者が、心の中で、「この子供は出来がわるい」という精神波動を起しまして、その子供をそういう心で見詰めている限りは、その子供は決して学習がよく出来るものではありません。
(新編『生命の真相』第47巻17～18頁)

子供を信じるほめ言葉が子供を善くする

親の心[。]が子[。]に映[。]るの[。]が実[。]際[。]の事[。]実[。]とし[。]た[。]な[。]ら[。]ば、親[。]達[。]はも[。]う少[。]し考[。]え直[。]さね[。]ば[。]な[。]ら[。]ない[。]だ[。]ら[。]う[。]と思[。]う[。]ので[。]あ[。]り[。]ます[。]。子[。]を教[。]育[。]す[。]る[。]前[。]に[。]先[。]ず[。]親[。]が自[。]ら[。]を教[。]育[。]し[。]な[。]け[。]れ[。]ば[。]な[。]ら[。]ない[。]と考[。]え[。]ざる[。]を[。]得[。]ない[。]ので[。]あ[。]り[。]ます[。]。

子の成績が悪いというのも、親、或は学校の先生が悪い[。]として[。]いる[。]場[。]合[。]が[。]多[。]い[。]ので[。]あ[。]り[。]ます[。]。千[。]葉[。]県[。]の白[。]里[。]村[。]に[。]小[。]倉[。]久[。]之[。]丞[。]さん[。]と[。]い[。]う[。]小[。]学[。]校[。]の[。]先[。]生[。]が[。]あ[。]り[。]ま[。]す[。]。(中[。]略[。])
或[。]日[。]、他[。]の[。]教[。]室[。]の[。]授[。]業[。]時[。]間[。]を[。]参[。]観[。]し[。]て[。]お[。]ら[。]れ[。]ま[。]し[。]た[。]ら[。]、

その組の受持の女の先生が一人の子供をつかまえて大変怒^{おこ}っておられたのです。「お前位出来の悪い子はない。実にお前はなまけものだ。先生の教えを少しも注意してきかない」といってひどく叱^{しか}られていたのであります。やがてその時間がすんでから、徐^{おも}ろに小倉久之丞先生がその子に近付いて「あなたは好^よい子だねえ」と静かにお褒^ほめになったそうであります。「あなたはよく勉強するね、きつとよく出来る子になるよ!」と柔^{やわ}しい、しかし、子供の善さを固く信ずるような語調で、簡単にほめられたのでありますが、それ以後その子の性質が一変して、大変よく出来るようになったのであります。その事実を見て、職員会議の時にその女の先生が起^たち上^あって告白されたそうであります。「私のこれ迄^{まで}の子供の教[。]え[。]方[。]は[。]間[。]違[。]つ[。]て[。]い[。]ま[。]し[。]た[。]」[。]と[。]い[。]つ[。]て[。]皆[。]の前[。]で[。]懺^{ざん}悔^げされた[。]と[。]い[。]う[。]こ[。]と[。]で[。]あ[。]り[。]ま[。]し[。]た[。]。単[。]に[。]そ[。]れ[。]だ[。]け[。]の[。]優[。]し[。]い[。]、[。]信[。]じ[。]て[。]く[。]れ[。]る[。]賞^ほめ[。]言[。]葉[。]が[。]、[。]子[。]供[。]を[。]善[。]く[。]す[。]る[。]ので[。]あ[。]り[。]ま[。]す[。]。「お前[。]は[。]ほ[。]ん[。]と[。]に[。]よ[。]い[。]子[。]だ[。]よ[。]」[。]と[。]い[。]う[。]、[。]そ[。]れ[。]だ[。]け[。]の[。]言[。]葉[。]に[。]す[。]ら[。]子[。]供[。]を[。]生[。]か[。]す[。]力[。]が[。]あ[。]る[。]ので[。]あ[。]り[。]ま[。]す[。]。(中[。]略[。])ち[。]よ[。]つ[。]と

した言葉で子供が良くもなり、悪くもなる、通信簿に書いてある子供の成績は、実は親の成績表であり先生の成績表だといって好い位であります。

（新編『生命の真相』第22巻20～23頁）

子供をよく育てるには、まず親の心をよくすること

子供をよく育てるには親がよくならなければならないということは、千古不磨の真理であります。子供は親の延長なので、親がよくならないでいて、子供にはかり口小言をいって、その小言によってよくしようと思っても、却ってあまり口小言をいわれると反抗心が起るばかりであります。言葉で小言をいわないで形で示す、生活で示すという事に致しましたならば、人間は模倣性の強いものでありますから、自然と真似するようになっていき生活を送るようになってくるのであります。

しかし、本当に子供を善くしたいと思う親は生活の形をよくする以上に、親自身の心をよくするように心掛け

ねばなりません。（新編『生命の真相』第47巻105～106頁）

子供は本来神の子である

人間には仮の相と本当の相とがあるのです。（中略）、親が心で縛っているとそれに反抗するために、或は操行がわるくなったり、成績が悪くなったりして、周囲の心の反影として出て来る、これが仮の相でありまして、本来その子の操行がわるいのも学業の成績が悪いのもないのであります。人間の本来の相、本当の相は神の子でありますから、「本来この子は善い」と、子供の実相、その本当の相を見て、それを拝み出すようにしますと——拝むといつても、強ち掌を合わせなくても無論好いのですけれども——心で子供を拝む——「うちの子供は本当に神の子であって立派な子である。放つておいても大丈夫である。決して悪くなるようなことはないのである」と子供を信じて心で拝むのであります。

（新編『生命の真相』第47巻56頁）